The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	J.M.CoetzeeのDisgraceにおける主人公の'disgrace'とは : 『イサクの献供』との関わりを中心に
Author(s)	村上, 八重子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2008, 2007, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77340
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

J.M.Coetzee の *Disgrace* における主人公の'disgrace'とは

——『イサクの献供』との関わりを中心に——

村上 八重子

1．はじめに

南アフリカ出身の英語文学作家 J.M.Coetzee の 1999 年発表の作品 *Disgrace* では、アパルトヘイト廃止後の南アフリカ社会の抱える深刻な問題以外にも、親子関係、大学改編、人種差別、動物愛護、ジェンダーの問題などさまざまなテーマが描かれている。ケープタウン工科大学で教える主人公 David Lurie は関係を持った女子学生から告発され、結果職を失ってしまう。田舎で独り農業を営む娘 Lucy のところに身を寄せるが、ある日父娘は黒人の若者 3 人に襲撃される。Lucy は警察にレイプの事実は告げず、他の土地へ移るようにとの David の説得にも耳をかさない。暴行の結果妊娠していることが判明した後も人工中絶は受け入れず、隣に住む黒人 Petrus の第三番目の妻になり、子どもとともにその土地にとどまり続けることを決める。これらのことすべてを理解できないままに David は動物クリニックのボランティアをしながら様子をうかがうしかない。クリニックでは Lucy の友人 Bev によって引き取り手のない動物の安楽死が行われており、David は深く心を揺さぶられることになる。

簡潔な表現と緻密な構成を持つこの物語の最後で、David が、彼をすっかり信頼するようになっていた野良犬を抱き上げて安楽死へと導く場面はとりわけ印象的である。David 自身も愛情を感じるようになっていたこの犬を、なぜ殺してしまわなければならなかったのだろうか。その理由は示されておらず、いろいろな解釈が可能な部分である。

筆者にはこの場面は旧約聖書の『イサクの献供』のエピソードを思い起こさせる。神はアブラハムに、愛する息子イサクを燔祭として捧げるよう呼びかける。そしてアブラハムは神を信じるがゆえにそれに従おうとし、それをよしとした神に祝福されるのである。

David はセクハラ事件、辞職、襲撃、娘の妊娠など、自分を取り巻く何もかもが'disgrace'であると感じるのであるが、この最後の場面で、彼は愛するものを犠牲にすることでなんとか神の恩寵にすがろうと考えているのではないか。しかし、彼の'disgrace'はセクハラ事件がきっかけだったにせよ、その一つの出来事だけから始まったのではない。にもかかわらず自省がないままに周囲との関係は悪化してゆき、そのためこの最後の安楽死の場面は神への儀式としては不十分なもの、という印象をぬぐいきれず、彼はその後も'disgrace'の状態にとどまり続けることが予想されるのである。

彼の'disgrace'とはどんなものであるのだろうか。そして彼はどのようにその状態から抜け出せると考えているのか。筆者は、それはDavidがアブラハムによる息子『イサクの献供』を具現化すること、と考え、以下、物語の最後の場面にいたるまでのDavidの思考や発言に着目し、David にとっての'disgrace'が持つ複数の意味を再検討する。そしてそれらがどのように『イサクの献供』につながっていくのか、その関連を示したいと思う。

2.『イサクの献供』と「子殺し」というテーマ

旧約聖書の第２２章で、神はアブラハムの信仰をためし、彼に「君の子、君の愛するひとりご、イサクを連れてモリヤの地に赴き、燔祭として捧げなさい」と命じる。燔祭とは古代ユダヤ教における最も古く、かつ重要とされた儀式であり、いけにえの動物をまず刃物で首を切って殺してから、祭壇上で焼き、神に捧げたのである。最も重要な儀式であるからこそ、神に捧げる供物はその人が持つ最高のものでなければならなかったのである。

一方、*Disgrace* の最後の場面は、

> He opens the cage door. 'Come,' he says, bends, opens his arms.
> (...) Bearing him in his arms like a lamb, he re-enters the surgery. 'I thought you would save him for another week, ' says Bev Shaw. 'Are you giving him up?'
> 'Yes, I am giving him up.' (220) [1]

で終わっている。

いけにえの羊のかわりに愛する息子を神に捧げる行為と、野良犬を羊のように抱き上げて手術台に運ぶ行為。年老いたアブラハムが初めて本妻とのあいだに授かった独り息子と、誰からも貰い手のない犬、しかも体に障害を持つ野良犬を同列に考えるのは一見誤りのようにも思える。しかし、後述するように、David は保護期限のすぎた犬の安楽死の処理を手伝いながら、「愛」を学んだ、というのである。そして彼が中でも特別な感情を抱くにいたった犬をこの最後の場面で手術台に運ぶ決心をするのはなぜか。

この行為は本物の儀式のすりかえにすぎない。そして本物の燔祭とは Lucy の赤ん坊にほかならない。それではなぜ David は赤ん坊を殺さねばならないのだろうか、という問いが浮かぶ。

子殺しというテーマは、18 世紀後半のドイツ、その後イギリスでも多くの作品を生み出したモチーフである。身分違いの恋、たいていは主人と召使、貴族と平民の娘という、結婚に結びつかない関係を持った結果、妊娠してしまった無力な娘が、生まれた子を殺してしまうというものである。それは当時婚姻外の出産は「恥辱」だと考えられていたからである。

---

[1] テキストは J.M.Coetzee. *Disgrace*（Vintage, 2000）を使用し、下線はすべて筆者による。

Lucy の妊娠は、三人の黒人による暴行の結果の望まれないものであり、父親はひょっとしたら精神に障害を持つ少年かもしれないのである。混血で、しかも健康体ではないかもしれない、誰からも望まれない赤ん坊。当初 David の意識の中ではこの赤ん坊はまさに「恥辱」を意味していた。しかし、他の誰からも見捨てられるような存在でも愛することができるということを David は診療所での手伝いから学んでゆく。つまり、「恥辱」であった存在と神への燔祭たるべき「愛する独り子」がここで同じものとして David の前に現れるのである。

別の場面で David 自身が「子殺し」とは別の文脈でブレイクの詩を引き合いに出しているが大変暗示的である。

> 'Do you remember Blake?' he says. 'Sooner murder an infant in its cradle than nurse unacted desires'? (69)

3. David の 'disgrace' とは

この *Disgrace* というタイトルは非常に示唆に富む語である。邦題では *Disgrace* は「恥辱」と翻訳されている。しかし、この語は単に「恥」であるとか、「不名誉」「失脚」だけを意味するのではない。まず'grace' の意味を再度確認してみたい。OALD の定義によると、'grace'とは「優美」であるとか、「わきまえ」、「愛顧」、「神の恵み」, 「食前［後］の感謝の祈り」などとなっている。では、'disgrace'とは「優美でないこと」、「ものごとをわきまえていないこと」、そして「神の恵みを失うこと」、あるいは「食事の前や後の感謝の祈りを捧げないこと」、とも考えられる。こういったさまざまな'disgrace'が作品全体を通して繰り返し形をかえてあらわれる。

David の'disgrace'について述べるに際して、まず *Disgrace* の構成と極めて類似した設定を持つ物語の可能性を指摘しておきたい。それは 1919 年にアルトゥール・シュニッツラーによって書かれた『カサノヴァの帰還』である。

５３歳、名誉も金も失ったカサノヴァが老いと性について意識するというのが大きなテーマとなっている。カサノヴァにも David 同様、いくつかのさほど重要でない著作があり、David はバイロンについてオペラを書き上げるという野望を抱いているが、カサノヴァはヴォルテールについての本を執筆中である。両者とも若い時には多くの女性と浮名を流していたが、年とともにその魅力も衰えだしたことを自覚せずにはいられない。カサノヴァはマルコリーナという二十歳にも満たない勉強熱心な娘を誘惑するが、彼女から色よい反応を引き出せないため、彼女の恋人の弱みにつけこんでこっそりすり替わり、無理やり自分のものにしてしまう。

女性とのスキャンダルで David も YOUR DAYS ARE OVER, CASANOVA (43)、と非難のメッセージを受け取るくだりがあることからも両者の類似はあきらかであろう。

フロイトはこの作品にエロスとタナトスの問題を読み取ったといわれている。エロスと

は「性」、すなわち「生」であり、「老い」とは人生の終焉であると同時にひとつの時代・文化の終焉でもある。ひとは誰しも「せい（性・生）」の舞台から、何の未練もなく退場できるとは限らない。David も頭では理解していても実際はこの問題となかなか折り合いをつけることができず、カサノヴァと同じく二十歳の Melanie を誘惑し、結局大学を追われることになってしまう。この老いと性に対しての David の悪あがきともいえる態度はまさしく「ものごとをわきまえておらず」、ついには「失脚」する結果となってしまうのである。

彼は絶対音感を持つ人が、救急車のサイレンや鳥の声までを音符として解釈してしまうように、言葉にことさらに敏感な感覚を持つ。たとえば名前を聞けばたちどころに語源や、関連した文学作品などが頭に浮かんでしまう。そしてそれを実際の状況や人物に結び付け、その固定観念から抜け出せない。また、この絶対音感が科学的に検証不可能な部分が残っている能力であるのと同様、彼の認識にもまた１００％確実といえるものはない。この能力は「神の恵み」なのであろうか。せっかくの賜物であっても正しく用いないのであれば、いずれ「神の恵み」も失われてしまうことは明らかである。

まず人の名前に対する David の執着は顕著である。たとえば David は関係をもつ女学生 Melanie とその妹 Desiree に対して、

> Melanie – melody: a meretricious rhyme. Not a good name for her. Shift the accent.
> Melàni: the dark one. (18)
> Desiree: now he remembers. Melanie the firstborn, the dark one, then Desiree, the desired one. Surely they tempted the gods by giving her a name like that. (164)

と、姉については名前のアクセントを変えることで彼女の肌の色を示唆すると同時に性格をも名前と結びつけ、年端もいかぬ妹からもその名前から欲望を喚起されるのである。

また、彼はしばしば傾倒する作家や作中人物にも自分や他の人間を同一化させてしまう。自分自身の正当化や他人の人物評価にそのまま転用しようとするその語り口は、自らの知識に酔っているかのように饒舌で、決して「優美」とは言い難い。

> '(...)Byron the man found himself conflated with his own poetic creations – with Harold, Manfred, even Don Juan.' (31)
> 'Lucifer,' he says. 'The angel hurled out of heaven. (...) At home Lucifer, the dark angel, does not need to breathe. All of a sudden he finds himself cast out into this strange "breathing world" of ours. "Erring": a being who chooses his own path, who lives dangerously, even creating danger for himself. (...)'
> (...)'So, what kind of creature is this Lucifer?
> (...)' Good or bad, he just does it. He doesn't act on principle but on impulse, and the source of his impulses is dark to him. (...)' (32-33)

とはいえ、David は職業柄、ことばの持つ限界や、特に英語という言語のおかれた現状に対しては一見客観的にとらえ、批判・分析しているかのようにも思える。

> Nothing to be proud of: a prejudice that has settled in his mind, settled down. His mind has become a refuge for old thoughts, idle, indigent, with nowhere else to go. He ought to chase them out, sweep the premises clean. But he does not care to do so, or does not care enough. (72)

しかし、彼はたいていの場合、抽象的な概念をもてあそぶだけで、彼の意識の底に巣食った差別意識やエリート意識などがあちこちで顔をのぞかせる。が、まったく罪悪感はなく、その態度を改める気も毛頭ない。また娘に対する感情も矛盾している。David は自分が描く理想の娘の人生と、彼女が自分で決めた生き方とにある差にどうしても眼をつむることができない。生き方だけでなく、容姿や日常生活の細かな習慣までが David の観察眼のもとに批判を持って語られる。自立した彼女を褒め称える一方で、このように痩せてくたびれた土地で、娘は本当に人生を送るつもりなのか、一時的な暮らしであってほしい、とも願うのである。一見娘の自立を認めるようなことばにも、やはり皮肉が色濃く滲む。そして Lucy は父のそんな考えを敏感に感じ取っている。

そしてレイプについては口を閉ざし、父とも話し合おうとしない Lucy を David は理解できず、逆に彼女の「愛顧」が失われていく様子が容赦なく、繰り返し描かれる。にもかかわらず、自分の沈黙の自由は打って変わって雄弁に主張する David の態度はまさに'disgrace'といえる。

ここで、この襲撃事件をめぐる父と娘の態度は、南アフリカの「真実和解委員会（Truth and Reconciliation Commission[2]）」との類似とその活動の困難さを浮き彫りにする。すなわち、個人によるものであろうと、国家組織によるものであろうと、暴力や犯罪というものには自然と和解が訪れるということは絶対にない。しかし被害の申し立てには非常な精神的苦痛をともなう。次にその被害内容が「真実」として認められるためには、委員会なり、警察や裁判所なりの調査を受けなければならず、被害者は必然的にその被害内容を再度体験することになる。それが行われたとしても、肝心の加害者の側には真実の告白と和解に対する無理解や拒絶が根強い。これらが解決されなければ、「事実と引き換えの和解」の達成はほぼ不可能である。

自分たちへ直接向けられた憎しみや暴力に対しては、何の躊躇も泣く「法」や「正義」を振りかざすことができる無神経な David は当然のこと、そんな David を非難し、農場に留まると決めたにもかかわらず、生活が投げやりになっていく Lucy の両者を見ると、「真実和解委員会」の掲げる目標や、委員会のいう「真実」「和解」ははたして現実には存在し

---

[2] Truth and Reconciliation Commission については http://www.doj.gov.za/trc/を参照。

えるのだろうか、という疑問が生じる。後述するように、決して David だけが特別に無理解・無神経なのではなく、アパルトヘイトにおける「加害者」を考えるとき、自覚・無自覚にかかわらず、特権階級に暮らしていた当時の多くの人々が告発を免れ得ないからであり、和解よりも、報復のほうがずっと容易におこってしまうことは歴史のどこを見てもいくらでも例が見つかるからである。

物語全体を通して David の思考と行動は常に大きなずれを抱えており、そのずれはいずれも'disgrace'として周囲の人間をも巻き込み、彼を孤独に追い込んでいく。彼はそれを意識しているが、自分の主義に固執し、他の考え方を受け入れようとは決してしない。

だが、ある言動を'disgrace'というとき、そう判断するのは誰だろうか？

David は離婚した元の妻に職を失ったことについてきかれ、次のように答える。

> 'She［Lucy］told me you were in trouble.'
>
> 'Not just in trouble. In what I suppose one would call disgrace.' (85)

David の失脚について同僚や元妻らはそう考えている。が、実際のところ、本人は意に介していない。むしろ自分の主義を貫き通したわけであり、Melanie の父に謝罪をするときにも言葉とその内心は一致していない。

一方娘 Lucy が暴行され、結果妊娠し、昔であれば小作人の立場だったはずの黒人 Petrus の妻になってでも子どもとこの土地に住むという決意に対して父 David は何度も「恥」を意識する。この'disgrace'とは「恥」と同意であり、なによりも David 自身がそう感じていることをあらわしている。

> Lucy's secret: his disgrace. (109)
>
> Too ashamed, they [rapists] will say to each other, too ashamed to tell, and they will chuckle luxuriously, recollecting their exploit. (110)
>
> She does not reply. She would rather hide her face, and he knows why. Because of the disgrace. Because of the shame. (115)

しかし David は Lucy に直接にはこれらの言葉を用いない。'respect', 'humiliate'などといった言葉で、Lucy に自尊心を取り戻すためにも暴行の犯人と思しき少年を警察につきだすように懇願する。が、Lucy はそれに応じない。Lucy は、David とはむしろ自尊心を傷つけられ、何もかも失ったゼロの地点からはじめることを学ぶべきかもしれないと考えているのである[3]。

---

[3] しかし前述したとおり、彼女の生活は次第に無気力なものとなっていく。仮に加害者が逮捕されて罪を認め、赦しを乞うたとしても彼女との間に和解が成立することは難しいと考えられる。なぜならばそのためには「真実」の確定のために再度両者が事件を語る必要があるからで、

'How humiliating,' he says finally. Such high hopes, and to end like this.'
'Yes, I agree, it is humiliating. But perhaps that is a good point to start from again. Perhaps that is what I must learn to accept. To start at ground level. With nothing. Not with nothing but. With nothing. No cards, no weapons, no property, no rights, no dignity.' (205)

Lucy の妊娠を知る少し前に David はメラニーの父アイザックスをたずねる。アイザックスは David に、彼の進む道は神が決めることだ、神にたずねよ、とつげる。アイザックスと対峙することによって「神」がはじめて David の意識に入り込む。ここで'disgrace'という語の持つ意味に新たに「神の恩寵を失う」という意味が加わる。
メラニーの父に謝罪し、母にひざまずいて許しを請うたところで不十分なのである。では、赦しを請わねばならないのは神なのか。神の恩寵を再び得るためには何をすれば足りるのか、という思いが浮かぶことになる。

'(...) The question is, what lesson have we learned? The question is, what are we going to do now that we are sorry? (...) The question is, what does the God want from you, besides being very sorry? (...)'
'I am sunk into a state of disgrace from which it will not be easy to lift myself. (...) On the contrary, I am living it out from day to day, trying to accept disgrace as may state of being. Is it enough for God, do you think, that I live in disgrace without term?' (172)
With careful ceremony he gets to his knees and touches his forehead to the floor. Is that enough? he thinks. Will that do? If not, what more? (173)

そうして聞かされた妊娠のニュースは David にとって非常に大きなショックであった。

A father without the sense to have a son: is this how it is all going to end, is this how his line is going to run out, like a water dribbling into the earth? Who would have thought it! (...) Standing against the wall outside the kitchen, hiding his face in his hands, he heaves and heaves and finally cries. (199)

この場面では、'father'とは胎児の生物学上の父かもしれない黒人少年を指すと同時に、Lucy の庇護者、と彼自身が依然信じている David をも意味する。彼の中では「祖父」と「父」の混同が起こっている。そして Lucy が子どもを生み育てるといっているにもかかわらず、'father'の位置を追われた David はそれを「終わり」だと感じて慟哭するのである。

それは加害者よりも被害者にとって、より精神的苦痛の大きいプロセスである。Lucy については別の機会に検討したいと思う。

診療所で娘の友人 Bev が執り行う動物の安楽死の手伝いのなかで David は「愛」を学ぶにいたる。人ではなく、野良犬からそれを学ぶのである。

> He has learned by now, from her［Bev］, to concentrate all his attention on the animal they are killing, giving it what he no longer has difficulty in calling by its proper name: love. (219)

そして愛する対象になってはじめて、それは神に捧げるにふさわしいものとなる。

旧約聖書のカインの例をあげるまでもなく、神に捧げるものは、自分の持てるものの中で最良の、最愛のものでなければならないからである。

この場面にいたるまでに、物語全体を通してさまざまな場面で「炎・火・燃える・熱 (light, candle-flame, fire, etc)」などといった表現を多用していることに気づかされる。消えかかる生命の炎、身も心も焦がす恋の炎や欲望の火、マラリアの高熱にうなされる子どもの「あつい（'So hot, so hot, so hot!'）」という声、そして安楽死させられた動物たちを燃やし尽くす焼却炉の火として。それはあたかも燔祭のための薪を積み上げていくことであるかのようにも見える。そして、いよいよ David が自分になつくようになった犬を Bev のもとに運ぶ時がやってくる。

> He can save the young dog, if he wishes, for another week. But a time must come, it cannot evaded, when he will have to bring him to Bev Shaw in her operating room (...) and the next day wheel the bag into the <u>flames</u> and see that it is <u>burnt, burnt up</u>. He will do all that for him when his time comes. It will be little enough, less than little: nothing.
> He crosses the surgery. 'Was that the last?' asks Bev Shaw.
> 'One more.'
> He opens the cage door. 'Come,' he says, bends, opens his arms.
> (...) Bearing him in his arms like a lamb, he re-enters the surgery. 'I thought you would save him for another week,' says Bev Shaw. '<u>Are you giving him up?</u>'
> '<u>Yes, I am giving him up</u>.' (220)

ここで用いられている'give up'という表現は何かを「あきらめる」という意味と同時に、何かを別の相手に「差し出す、ゆだねる」という意味をも含んでいる。David が、つまり作者 Coetzee がそのことに無自覚であったとは考えられない。Lucy の赤ん坊と David の今後については読者の自由な解釈にまかされているわけであるが、しかし、十分にそれを予感することができるエンディングとなっている。

4．おわりに

David は自分を取り巻く何もかもが'disgrace'であると感じる。社会的地位を失うという

制裁だけでは David のすべての'disgrace'を帳消しにするには不十分である。そこで愛するものを捧げることで神の恩寵を得ようとするわけであるが、しかし、David の言動は物語の最後までなんら'graceful'なものではなかった。彼の思考は知識と抽象のなかで空回りを続け、現実世界と接するのは暴力・犯罪か、死と向き合ったときだけなのであり、自分のごく近くにいる人々とすら結局真に理解することはできないままに終わる。周囲の状況、歴史にたいしてもその態度は同じであった。すべては知識としてのみ認識され、現実におこっていることは対岸の火事であるかのように振舞う。その態度こそが彼の'disgrace'である。よって神は David の捧げものをよしとしないであろう。息子の頭上にまさに刀を振り下ろそうとするアブラハムの手を、すんでのところで神の使いが止めたように、注射針を持つ手が止められることはない。犬は死んでゆくのである。そしてもう一つの捧げものの可能性が浮上する。すなわち、Lucy の赤ん坊、父親は黒人で、しかもあきらかに障害を持つ少年かもしれないという、誰からも、少なくとも David からは望まれない子なのである。引き取り手のない動物と、望まれない赤ん坊。しかし、どんな存在からもひとは愛を学ぶ。David は妊娠中の Lucy にたずねる。

> 'Do you love him yet?'
> 'The child? No. How could I? But I will. Love will grow – one can trust Mother Nature for that. (...)' (216)

Lucy 同様、David もまた赤ん坊をも愛するようになるであろう。

実際に David が子どもに手を下すという意味ではない。が、彼はきっとその儀式を何度も何度も頭に思い描く。彼が自分の'disgrace'を直視しようとしない限り、彼がこの状態から救われることはないからである。こうして『イサクの献供』のイメージは David の'disgrace'と結びついたまま、彼にまとわり続けることとなる。

しかし果たしてそれは David だけの問題なのであろうか。南アフリカの特権階級にいた白人であれば多かれ少なかれ同じ'disgrace'を共有しているのではないだろうか[4]。そして同じ時代を生きるわれわれもまた、世界中で起こっている不正や不公平、矛盾と無関係とはいえない。だがわれわれの多くはそれを知りつつも David と同じく「対岸の火事」程度にしか認識していない。その意味でわれわれは David の頑迷さを笑うことはできないのである。

---

[4] たとえば David の情事の相手が、南アフリカの学校での治安の悪さについて不満を述べた後に、ニュージーランドへの移民リストに夫婦で名前を載せて３年になる、と言う場面があり（3ページ参照）、南アフリカを脱出しようとする人数が非常に多いことや、アパルトヘイト廃止後、急激に歴史認識が低下していることなどが垣間見える。

主 要 参 考 文 献

Ashcroft, Bill, Griffiths, Gareth and Tiffin, Helen. *The Empire Writes Back,* Routledge, 1989.
（ビル・アッシュクロフト、ガレス・グリフィス、ヘレン・ティフィン『ポストコロニアルの文学』木村茂雄訳、青土社、1998.）

Attridge, Derek. "Age of Bronze, State of Grace" *Disgrace J. M. Coetzee and the ethics of reading.* The University of Chicago Press, 2004: 162-191.

Head, Dominic. *J. M. Coetzee.* Cambridge University Press, 1997.

Schnitzler, Arthur. "Casanovas Heimfahrt" *Gesammelte Welke, Die Erzählenden Schriften. 2. Bd.* Fischer Verlag, 1919, c1981.

Spivak, Gayatri Chakravorty. "Ethics and Politics in Tagore, Coetzee, and Certain Scenes of Teaching." *Diacritics 32, no.2(2002)* : pp17-31.

Stanton, Katherine. "History is larger than Goodwill: Restitution and Redistributive Justice in J. M. Coetzee's *Age of Iron* and *Disgrace*" *Cosmopolitan Fictions.* Routledge, 2006. 61-77.

Yeoh, Gilbert. "Negotiating Foundations: Nation, Homeland, and Land in J. M. Coetzee's *Disgrace.*" *Ariel vol.35.3-4 July-October 04.*(2006): 1-38.

木村茂雄（編）　『ポストコロニアル文学の現在』晃洋書房、2004.

佐藤正樹　『うちに子どもが生まれたら』星雲社、1995.

関根正雄（訳）『旧約聖書創世記』岩波文庫、2006.

横田忍　『赤ん坊殺しのドイツ文学』三修社、2001.

本稿は、日本芸分学会関西支部第二回大会（於：大阪大学、2007 年 12 月 22 日）での研究発表、「J.M.Coetzee の *Disgrace* における『イサクの献供』のイメージ」に加筆・修正したものである。